

## 帰国生受け入れ状況と国際交流活動について

Returnee Acceptance Situation and International Exchange Activity

### 帰国生・留学生委員会

#### <要旨>

昨今の社会状況の変化を踏まえて、この約10年の帰国生の受け入れ状況を振り返り、どのような問題点があるか考察した。その結果、混合受け入れ方式である本校の帰国生教育のあり方を、受験前に理解してもらい、受験生の性格なども加味して、本校に適應できるかどうかまで保護者に考えてもらうことが必要なことが分かった。また、帰国生の変化にともなって、帰国生に対する英語の授業のあり方を検討する必要があることが分かった。

最近増えた国際交流活動についての業務は、単に、帰国生・留学生委員会だけでなく、学校全体で対応を考える必要があることが分かった。

<キーワード> 帰国生 帰国生・留学生委員会 適應 混合受け入れ方式 国際交流

#### 1 はじめに

本校では昭和51(1976)年度より毎年約15名で海外帰国子女を受け入れを開始して今日に至っている。約30年前から約10年前までの帰国生の受け入れの状況については、本校の紀要に、海外生・留学生委員会(1985)、海外生留学生委員会(1996)、海外生留学生委員会(2002)が示している。

また、本校では昭和50(1975)年度より、タイ王国政府派遣留学生の受け入れを開始し、平成24(2012)年度まで継続して受け入れてきた。ところが、平成25(2013)年度、平成26(2014)年度の2年間(60期、61期)は、この制度による入学者がなかった。

今回は、昨今の社会状況の変化を踏まえて、この約10年の帰国生の受け入れ状況を示すとともに、そこから浮かび上がった問題点を示しておく。なお、タイ王国政府派遣留学生については、現在編集中の40周年記念誌を参照されたい。

最後に、最近増えた帰国生・留学生委員会の業務である国際交流活動についても報告する。

#### 2 帰国生・留学生委員会とは

##### 2-1 帰国生・留学生委員会の業務

帰国生・留学生委員会は本校の校務分掌の1つで、従来、以下の業務を担当してきた。

- ① 帰国生の入試業務および、受け入れ
- ② 本校生徒の海外留学送り出し
- ③ タイ王国政府派遣留学生受け入れ

近年、これらの業務に加えて、海外からの生徒・教員

の学校訪問への対応および、国際交流活動に関する業務が増えている。表1に、帰国生・留学生委員会 平成27年度年間行事予定表を示しておく。

##### 2-2 帰国生教育のこれまでの流れ

本校では帰国生の入試業務および受け入れを、「海外生・留学生委員会」が行ってきた。平成16(2004)年度からは、分掌の名称を「帰国生・留学生委員会」に改めた。

従来、中山修敬教諭(英語)、津田洋征教諭(公民)、林正太教諭(現副校長、英語)、保戸塚由紀子教諭(英語)らが、ある程度の期間、委員長を務めてきたため、帰国生教育に関する経緯や、業務内容については分掌内で自然と引き継ぐことができた。

ところが、近年では教員の入れ替わりも増え、過去の経緯を知らない教員が、委員会の業務に就くことも増えている。そこで、海外生留学生委員会(2002)に基づき、帰国生を受け入れた当時の状況を示しておく。

保護者の海外赴任にともない海外現地校での教育を受けた帰国生であっても、日本の高校に進学するためには入学試験を受験することが必要となる。ところが、本校が帰国生を受け入れを開始した当初、帰国生には日本語や学習内容の違い等のさまざまな障壁があった。そのため、帰国生枠という特別な入学選抜制度と、入学後の学習面での配慮が必要とされたのである。本校では、帰国生の受け入れに当たり、当時次のような基本的教育方針が定められた。一部、抜粋して示す。

表1 帰国生・留学生委員会 平成27年度年間行事予定表

月	帰国生	タイ王国留学生	送り出し 留学生	国際交流	帰国生入試
4	質問タイムに向けたアンケート	対面式で挨拶(代表1名) 補習計画(1学期)	留学予定者 説明会	タイ チュラポーン交流 日中ティーンエイジア ンバサダー募集・決定	
5	8日(金) : 帰国1年生顔合わせ 16日(土) : 1年保護者会 質問タイム	7日(木): 補習開始	長期留学 案内掲示		
6	質問タイム		帰国予定生徒への連絡 留学杜行会		
7	1学期学習状況等集約			日中ティーンエイジア ンバサダー来校	帰国子女財団主催 説明会 夏の学校説明会
8			留学レポート		
9		補習計画(2学期) 辛夷祭出店			
10	質問タイム			日中ティーンエイジア ンバサダー派遣	秋の学校説明会 募集要項配布開始
11	質問タイム		帰国報告会		
12	2学期学習状況等集約			タイサイエンスフェア 参加	
1		補習計画(3学期)			願書受付
2	質問タイム		AIU 募集 (希望者のみ)		入試 合格者説明会
3	3学期学習状況等集約		帰国報告会	文集完成	

## 1. 趣旨（研究題目と目的）

海外在学経験者の教育については、これを一般生徒と隔離して集団的に教育するよりも、一般生徒の中に分散させて教育することの方がより教育効果があがるものであるということを前提として、当該生徒に対する特別指導はどのようにして行うべきであるかを、また、当該生徒の在外経験を一般生徒に有効に作用させる具体的方法を明らかにする……。

## 2. 教育実施の体制

(1) 海外在学経験者の教育には、一部の教官がこれに当たるものでなく、全教官が指導に参加する……。

(中略)

(3) 母国への順応状況および学力の状況について、……一定の期間ごとにその実情を調査把握し、特別指導の処置をとっていく。

(中略)

(5) 特別指導の必要のなくなった生徒については、なるべく速やかに一般生徒と同じ指導をしていく。

このとき、帰国生の受け入れ人数については、昭和50(1975)年度より始まっていたタイ王国留学生の教育、一般生徒への影響、分散方式による受け入れ計画等を考慮して、1学級あたり2、3名程度の配置が適当であると考え、1学年15～20名程度が海外在学経験者の定員となるとし、昭和51(1976)年度は16名の受け入れで開始した。

当時の「特別指導の処置」とは、学力面のハンディキャップの克服としては、1学年帰国生とタイ王国留学生を対象とした教科指導のことである。この点について、「心身両面における適応を考えると、教科外における学校生活にも積極的に参加し、自らの個性を発揮し得る場を獲得させることもまた、極めて重要な事柄である。したがって、生徒会活動、放課後の部活動、学級活動、その他の学校行事への参加の機会をも確保してやらなければならない。これと、放課後の教科指導は時間的な制約上は相反するものであり……また、校内諸分掌上の任務や部活動、委員会活動等の指導をかかえる教官に対する放課後の指導の委嘱は過重負担にならないか。さらには、タイ王国留学生の特別指導をも併せて考えなければならない。」と、今日でもそのまま通用する問題点を指摘している。

このような教育方針の下での帰国生教育は、次のような経緯をたどった。受け入れ当初は海外での補習校や塾が少ない状況下であり、入学当初における生活習慣、生活言語・学習用語、学習活動などの面でのハンディキャッ

プは今日よりも大きく、帰国生の抱く不安や違和感も大きいものであった。その対策としては、今日と同様に事前のオリエンテーション、保護者との密接な連絡や放課後の補習授業などを行ったが、さらに、長期休業時の補習授業等を実施した時期もあった（これらの補習授業ではタイ王国留学生と一緒に学ぶ科目もあった）。その後、補習については、海外における教育条件の整備等により、個々の帰国生に対応した、必要に応じた個別指導へと変わっていった。

その後、平成8(2001)年度、9(2002)年度に文部省(現文部科学省)のヒアリングを受けて、本校帰国生設置の目的が、帰国生教育の先端的な研究を行い他の帰国生受け入れ校の教育に寄与するという使命を担うことにあるという指導を受け、本校の帰国生受け入れ態勢の改革のため検討を行い、入試のあり方をはじめ改善を行った。

その結果、入試の学力検査を3教科に変更し、また、帰国生(1年生)に対して放課後の定期的な補習(選択制の補習も含む)を始めている。

現在では、帰国生の1年生顔合わせと2年生との懇談会を5月に行い、先輩から学習や学校生活についてのアドバイスをしてもらうとともに、泰山会総会の日に、帰国生1年生の保護者会を開いている。

平成27(2015)年度の場合、62期生を対象に、第1回帰国生顔合わせを平成27(2015)年5月8日(金)の昼休みに実施した。その内容は、

- ① 学年主任から
- ② 自己紹介
- ③ 61期先輩(4名)から、学習・学校生活についてのアドバイス
- ④ 質問タイムについての説明
- ⑤ 帰国生・留学生委員会の教員より

であった。

そして、62期帰国生保護者会は、平成27(2015)年5月16日(土)の泰山会総会の前に、12時から12時50分で実施した。その内容は、

- ① 副校長から
- ② 学年主任から
- ③ 帰国生・留学生委員会から近況報告
  - ・帰国生一覧
  - ・窓口生徒紹介
  - ・第1回顔合わせについて
  - ・アンケートについて
  - ・質問タイムについて
- ④ 保護者自己紹介

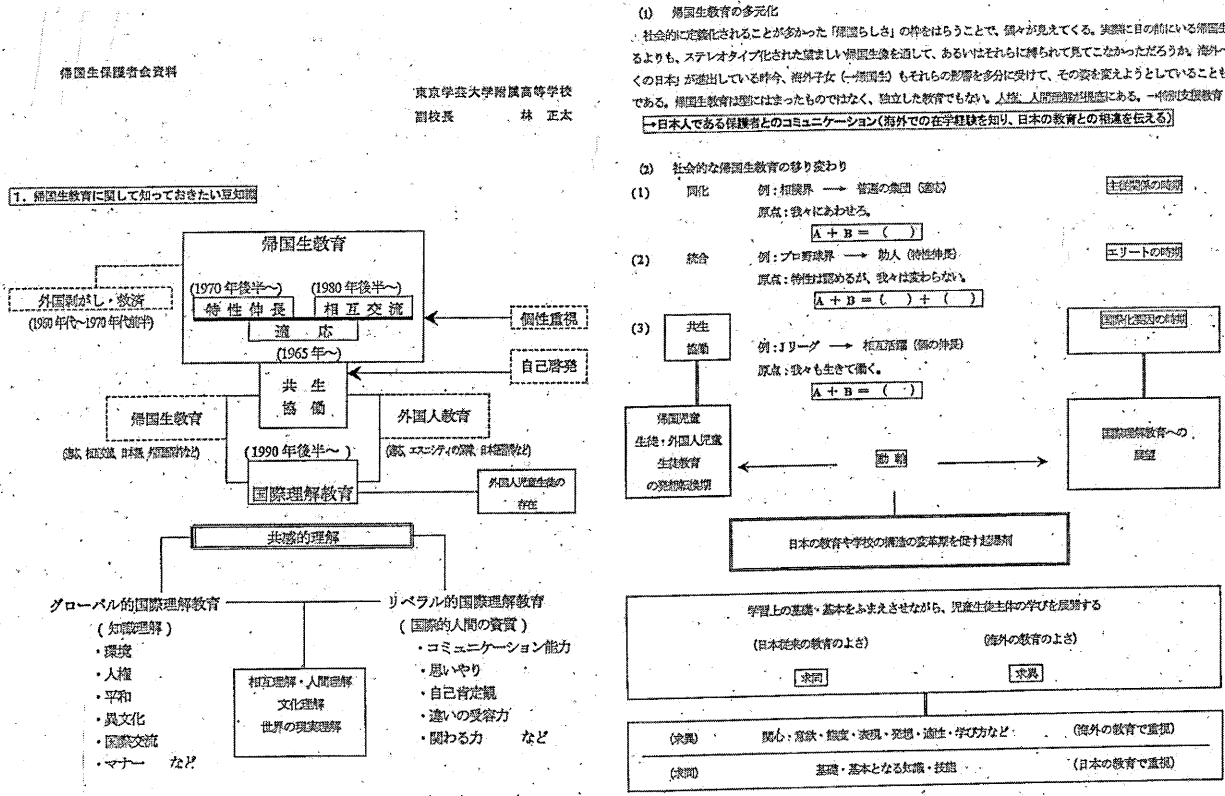


図1 配付資料「帰国生教育に関して知っておきたい豆知識」

⑤ 質疑応答

であった。その際、林副校長より、「帰国生教育に関して知っておきたい豆知識」という資料が配付された(図1参照)。

また、各定期考査前の一週間は、原則としてクラブ活動等が行われないため、その放課後を利用して、理科・社会の各科目を中心に、優先的に担当教員に質問できる質問タイムを設けている。平成27(2015)年度の場合、古典、地理A、日本史A、生物基礎、地学基礎の5科目で実施されている。

3 本校における帰国生受け入れの状況

本校では、従来、一般中学生と同様に、学力検査を5教科(英語・数学・国語・社会・理科)で行ってきた。平成11(1999)年度入試より、学力検査を3教科(英語・数学・国語)に変更した。その結果、平成10(1998)年度に29名(男子22名、女子7名)であった志願者数が、平成11(1999)年度には67名(男子41名、女子26名)に急増した。しかも、平成10(1998)年度に入学者16名(男子11名、女子5名)のうち、8名(男子6名、女

子2)であった現地校経験者の入学者が、平成11(1999)年度には入学者15名(男子9名、女子6名)のうち、13名(男子8名、女子5名)と、現地校経験者の入学者の割合が増えた。

帰国生の受け入れを開始して以来、募集人員は男女合わせて約15名であったが、大学の改組に伴い平成22(2010)年度入試では20名に、平成23(2011)年度、平成24(2012)年度では19名に変更した。平成25(2013)年度より再び15名として、今日に至っている。帰国生入試の志願者数および入学者数を表2に示す。

また、帰国生入試の出願資格は、平成28(2016)年度の場合、次のようになっている。

表2 帰国生入試の志願者および入学者数

年度	期	志願者数			入学者数		
		男子	女子	合計	男子	女子	合計
昭和51 ～平成15 合計		-	-	-	239	190	429
平成16	51	28	38	66	10	8	18
平成17	52	25	39	64	6	6	12
平成18	53	40	32	72	11	7	18
平成19	54	36	36	72	8	9	17
平成20	55	34	39	73	11	10	21
平成21	56	41	37	78	9	6	15
平成22	57	38	44	82	10	7	17
平成23	58	34	32	66	8	6	14
平成24	59	26	39	65	10	11	21
平成25	60	44	37	81	12	12	24
平成26	61	22	39	61	8	7	15
平成27	62	51	44	95	5	5	10

下記の(1)～(6)の条件をすべて満たすこと。

- (1)日本国籍を有すること。
- (2)生年月日が平成13年(2001年)4月1日以前であること。
- (3)平成28年3月までに、滞在先の国または地域にある学校に、日本の中学校の学齢期に相当する3年間のうち2年間以上在学し、教育を受けた者であること。
- (4)出願資格(3)においては、保護者の海外勤務に伴い、海外勤務を要する保護者と共に滞在した期間であること。
- (5)日本に帰国した場合は、帰国後、本校への入学までの期間が1年未満であること。
- (6)以下のいずれかの条件を満たすこと。
  - ① 日本の中学校か中等教育学校前期課程を平成28年3月までに卒業見込み・修了見込みの者。
  - ② 外国において、学校教育における9年の課程を修了した者、または平成28年3月までに修了見込の者。
  - ③ 文部科学大臣が、中学校の課程と同等の課程を有するものとして認定した在外教育施設の当該課程を修了した者、または平成28年3月までに修了見込の者。
  - ④ 中学校卒業程度認定試験により、中学校を卒業し

た者と同等以上の学力があると認定された者。

#### 4 帰国生受け入れの問題点

ここからは、本校の帰国生の受け入れについての現状に問題点がないかどうか考察を試みる。

##### 4-1 帰国生の受け入れ体制について

帰国生という条件で、本校を受験する際に、保護者や受験生は海外から帰国後の学校選択に迫られている。その際、学校選択の参考となるさまざまな情報を本やインターネットによって得ることができる。例えば、公益財団法人 海外子女教育財団のホームページの教育相談室 Q&A よくあるご相談によると、次のような記述が載せられている。

Q.18 帰国後の学校選択について教えてください。

A.18 日本国内で帰国生受験を実施している学校は、全国で1,200校以上になります。それぞれの学校には特徴がありますが、大きな括りで考えてみると、入学・編入学で帰国生の募集人数を別枠で設けている学校。人数は特に定めないが、審査にあたって何らかの配慮をする学校。また、海外生活によって不十分になった

日本の学習を入学後に特別なカリキュラムを設定して補ってくれる学校、入学後の特別な配慮はなく遅れた部分は自力で努力して補うことになる学校、また海外で習得した語学力や生活経験を維持・伸長することに力を入れている学校、あるいは進学校として学力向上を中心に力を入れている等様々です。できればお子さんと一緒に学校訪問もして担任の先生と話したり、校内の様子を見たりしてみましょう。

学校を選択するには家庭の教育方針、お子さんの性格、学力、興味関心等、総合的に判断し目標を絞り込んでいくことが大切です。最終的にお子さん本人が「充実した学校生活を送れるのはどの学校か」ということになります。

[<http://www.joes.or.jp/sodan/answer.html#18> より]

これらを受け入れの体制でまとめると、次の3つに大別されるであろう。

- ① 帰国生の受け入れを主な目的として設置されており、入学後は補習や語学の特別クラスを設けるなど、「受け入れ体制」が充実している学校
- ② 帰国生受け入れが学校の主な目的ではないが、一般とは別に「帰国生枠」を設け、入学後には何らかの「受け入れ体制」を持つ学校
- ③ 「帰国生枠」は設けるが、特別な「受け入れ体制」はない学校

本校の場合、語学の特別クラスなどは設置していないが、1年次での補習を中心とした適応指導を行っていることから、②に位置づけられる。

東京学芸大学の高等学校段階の附属学校として、平成24年(2012年)3月に閉校した東京学芸大学附属高等学校大泉校舎の場合は、まさに①に位置付けられた学校であった。その歴史については、東京学芸大学附属高等学校大泉校舎(2012)などを参照されたい。

東京学芸大学附属高等学校大泉校舎と附属大泉中学校とを統合・再編し、平成19年(2007年)4月に開校した東京学芸大学附属国際中等教育学校は、初期日本語指導・教科学習(教科授業)を支援するための日本語指導(Japanese as a Second Language)など、海外教育体験生徒へのケアを行っている。そのため、①に位置付けられる。

高校選択・受験の段階(附属国際中等教育学校の場合は、第4学年4月の編入)で、本校と附属国際中等教育学校とは、受け入れ体制の違いが明確である。そのため、個々の事情によって選択が可能であり、東京学芸大学の附属学校の中での受験の競合はほとんどないと考えられる。

#### 4-2 帰国生枠受験のための条件について

帰国生入試が国内一般入試と大きく異なる点は、帰国生としての出願における資格・条件である。本校の平成28(2016)年度の場合の出願資格は、前述したとおりである。

帰国生として入試を受けるための資格・条件は、海外滞在年数や帰国後の期間制限など、学校ごとに細かく決められている。特に気をつけておかなければならないのは、現地校・国際校から直接受験する場合に、原則としてその国の学校教育の9年課程を修了または3月末までに修了見込みであることが条件になっていることである。

文部科学省のホームページにおいて、  
高等学校入学資格 Q & A (高等学校入学資格・編入学)  
Q4 外国で義務教育を受けている日本国籍の生徒(ある国の学校の9年の課程を平成24年6月に卒業する予定。平成24年4月現在で14歳)について、平成24年4月に高等学校に入学することはできますか。

A4 平成24年4月の段階では、外国における9年の課程を修了しておらず、高等学校入学資格はありません。

また、平成24年4月に、9年の課程を修了する以前に帰国した場合は、当該生徒の保護者は、子が満15歳に達する日の属する年度の終わり(出生の日が平成9年4月2日から平成10年4月1日までの場合には、平成25年3月31日)まで、中学校等に就学させる義務を負います(学校教育法第16条及び第17条)。中学校等への就学に関する具体的な手続きについては、お住まいの市町村の教育委員会にお問い合わせください。

[[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/kaikaku/sikaku/1311012.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kaikaku/sikaku/1311012.htm) より]

とあるが、例えば、立命館宇治高等学校の2015年11月実施・2016年2月実施の入学試験では、出願資格に、以下の(1)または(2)に該当する者

(1)2001年4月1日以前に生まれ、次の①~④のいずれかに該当する者で、日本の義務教育期間における海外就学期間が1年6カ月以上の者。

①現地校・インターナショナルスクールにおける9学年の課程を修了した者、あるいは2016年6月までに修了見込の者。

\* 9学年の課程とは、日本の義務教育の課程に相当するものをいいます。

[[https://www.ujc.ritsumei.ac.jp/ujc/common/file/admission/document/2016\\_senior\\_kokusai.pdf](https://www.ujc.ritsumei.ac.jp/ujc/common/file/admission/document/2016_senior_kokusai.pdf) より]とあり、上述した文部科学省の見解と異なっているように

読める。詳細は不明であるが、このことが可能であれば、今まで、3月までに修了見込を得るために、日本の中学校へ編入するか、6月に修了した後、翌年の高校入試まで待つか、選択を迫られていたことが解決する。本校でも、現地校・インターナショナルスクールにおける9学年の課程を6月までに修了見込の資格で受験できないかという問い合わせは多くあるので、もし、今後、立命館宇治高等学校のような扱いができれば、受験資格の審査はかなり軽減されるように思う。

#### 4-3 編入制度について

附属国際中等教育学校では、第4学年、第5学年の各4・9月、および第6学年の4月（一般的な高等学校の第1学年、第2学年の各4・9月、および、第3学年の4月）に編入学選抜を行っている。

一方、本校では、定員に欠員がある場合に限り、保護者の転勤に伴う国内の高校生を対象にした転入学試験を実施したことがあるが、帰国生を対象とした編入学試験は実施していない。現在の生徒の在籍状況では、編入した生徒を受け入れるだけの余裕はなく、入学定員の増加等がない限り、本校での編入学試験の実施は困難であろう。

#### 4-4 本校が帰国生を受け入れる意義について

本校の場合、受け入れ開始当初から混合受け入れ方式である。そのため、入学してからしばらくは、周りは日本で教育を受けた生徒がほとんどであるという中で、生活習慣やクラブ活動を中心とした先輩・後輩といった上下関係など、さまざまな点で違和感を覚えるであろう。

海外生留学生委員会（2002）では、本校の帰国生受け入れの経験から、主に、欧米系の帰国生の、入学後に遭遇する適応困難さを、次の5項目に整理している。

- a 文化の違い（いわゆるカルチャーショック）
- b 言語に不慣れ（日本語理解について、特に文章表現力および聞き取り）
- c 学力面で欠落部分を抱えているハンディ（特に日本史に象徴される）
- d 過密の都市・学校・クラスへの違和感（ラッシュ時の通勤電車に象徴される多人数の混雑）
- e 親元から離れて一人暮らしの困難さ（海外に保護者が在留し続けている帰国生で単身帰国した者にとり環境が激変）

ただ、当時、在籍していた生徒の最終滞在国は表3の通りであるが、平成27（2015）年度に在籍している生徒の滞在国は、表4の通りである。図2に示したように、

当時と現在の帰国生の最終滞在国は異なっていて、当時、約96%を占めていた欧米系の帰国生が、現在は約51%と、その割合がおおよそ半減している。

このことについて、本校の教育方針の1つである「世界性のゆたかな日本人」の育成という点からは、欧米系に限定されず、さまざまな国や地域からの帰国生が入学していることは、むしろ喜ばしいことであると思われる。近年、タイ王国政府派遣留学生の入学数が減っていることもあって、一般生徒のみならず、帰国生同士でも、相互交流が世界性のゆたかな日本人の育成に、大いに寄与していると思われる。

なお、欧米系の帰国生が減少したことによる帰国生教育の変化については改めて分析が必要であろう。

また、帰国生枠で入学してくる生徒以外にも、海外生活経験を有する生徒がいることもあり、タイ王国政府派遣留学生の存在と相俟って、帰国生が特別視されることが少ないことも、本校が混合受け入れ方式を取ることを可能にしている。

さらに、62期1年生を対象に入学後に取ったアンケートによると、本校を受験した志望動機は、以下の通りである。

- ・自由で楽しそうに思ったから。
- ・姉が本校に通っていて、とても楽しいと聞いたから。
- ・広範囲の学習がまんべんなくできる。
- ・学校説明会で流れたCMが好印象だった。
- ・帰国枠がありながらも他の子と同じように生活できる。
- ・自由で活発な校風。文武両道。
- ・先に入っている先輩がいて、楽しいと聞いたから。
- ・附高は国立であり、高い教育レベルと進学実績を持つにもかかわらず、帰国生は3教科で受けることができ、入学後、帰国生の対応もしっかりしていると聞いており、最終目標にしやすいからです。
- ・自由な校風。共学だったこと。
- ・SSHということ。

この中に、帰国枠がありながらも他の子と同じように生活できるという回答があるが、本校に入学した帰国生も、特別扱いを受けず、他の生徒と同様の学校生活を送ることができることを支持していると考えられる。

混合受け入れ方式であるため、英語をはじめ、帰国生が獲得してきた言語の伸長という対応はしていないし、生徒自身が学校への適応に苦労しながら努力することが迫られているが、それらを差し引いても、本校が帰国生を受け入れる意義は極めて大きいと言えよう。

表3 帰国生最終滞在国 (46期～48期)

学年	国名	アメリカ	チリ	メキシコ	中国	中国(香港)	台湾	韓国	シンガポール	タイ王国	インドネシア	インド	カザフスタン	オランダ	イギリス	フランス	ベルギー	ドイツ	ザンビア	計
		3年(46期)	男	7													1			1
	女	3							1							1	1			6
2年(47期)	男	5													3					8
	女	4												1	2			1		8
1年(48期)	男	3													2	1	1			7
	女	3											1		3					7

表4 帰国生最終滞在国 (60期～62期)

学年	国名	アメリカ	チリ	メキシコ	中国	中国(香港)	台湾	韓国	シンガポール	タイ王国	インドネシア	インド	ウクライナ	アラブ首長国連邦	イギリス	フランス	ベルギー	チェコ	ザンビア	計
		3年(60期)	男	3			4				2			1			1		1	
	女	6					1	1	1		1		1	1						12
2年(61期)	男	3		1					1	1					1				1	8
	女	4				1			1									1		7
1年(62期)	男	1	1		1	1										1				5
	女	3									1				1					5

4-5 帰国生の進路について

56期～59期の帰国生の卒業後の進路については、図3の通りである。59期のその他は、進路未決定者で、56期～58期のその他は、海外の大学への進学等である。

この4年間の進路結果を見る限りでは、帰国生ではない卒業生と大きな差は見られない。また、帰国生であるからといって、語学を学ぶ学部・学科への進学が多いわけではなく、あくまでも獲得した語学力、主として、英語はツールとして使っていくという意識が強いように思える。

4-6 入学後の調査より

4-6-1 アンケート調査より

62期1年生を対象に入学後に取ったアンケートによると、授業・学校生活等について困っていることなどは以下の通りである。

① 授業について

- ・みんなが知っている理社の知識を全く知らない。
- ・理社は中学の範囲をカバーしきれていません。
- ・数学も授業のスピードが速いです。
- ・理社科の授業で質問されても答えられないこと。他のクラスメートについては常識であることもあまり分からないので、指名されて答えられないと公開処刑です。
- ・中学の時の知識を問われた時、わからない。
- ・いくつかの教科で中学で習ったことを前提に授業が進む。



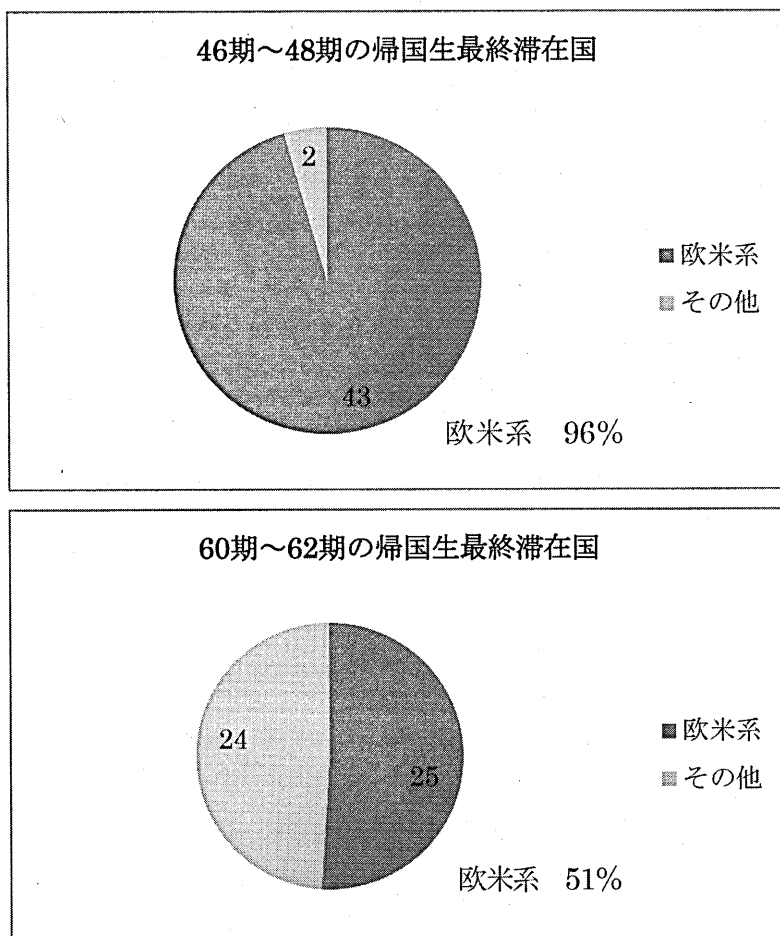


図2 帰国生最終滞在国の変化

② 難しい（補習が必要）と感じている教科・科目

（ ）内が、回答数である。

日本史A(4) 地理A(2) 生物基礎(3)

地学基礎(2) 数学I(1) 数学A(1)

現代文(1) 古典(2)

やはり、理科・社会について困ったり、難しいと感じたりしていることがわかる。現在、理科・社会については質問タイムを設けることで、対応している。多くの帰国生は、入学して学び続けていく中で、理科・社会の苦手意識を克服していく。近年はごく少数ではあるが、理科・社会を中心に授業についていくことができない生徒がいるのも事実である。その原因が日本語の読み書きにあるのであれば、日本語に慣れていくことで、学習成果が期待できる。ところが、単に、日本語だけでなく、学力の問題があると、学習成果をあげることは困難である。その結果、学校への登校も休みがちになり、進路変更という事態も生じてくる。せっかく入学してきたのに、学校生活を楽しめないような状況は、生徒、保護者、教員、すべての者にとって不幸である。そうならないようにす

るためには、本校の帰国生教育のあり方を、本校受験前に理解してもらい、受験生の性格なども加味して、入学後に本校に適應できるかどうかまで保護者に考えてもらうことが必要であろう。

なお、今までの経験上、神経質過ぎず、分からない時に周りの生徒に学習内容をたずねることができ、部活動、学校行事など、授業以外の活動に熱心に取り組む生徒は、入学後の適應にあまり問題がないように思う。

4-6-2 インタビュー調査より

さらに、2学期の期末テスト前に、62期1年生帰国生4人(以下、A～Dとする)にインタビュー調査を行った。

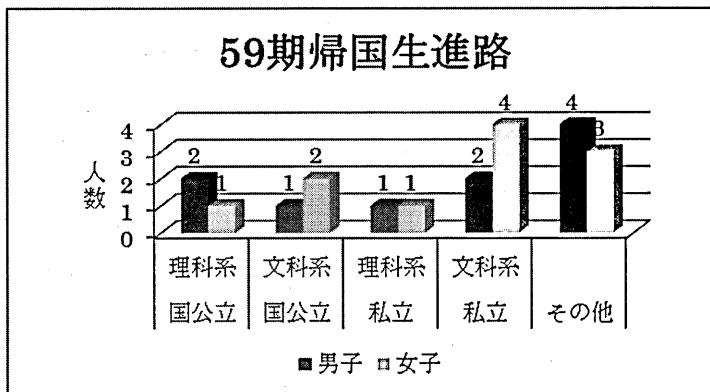
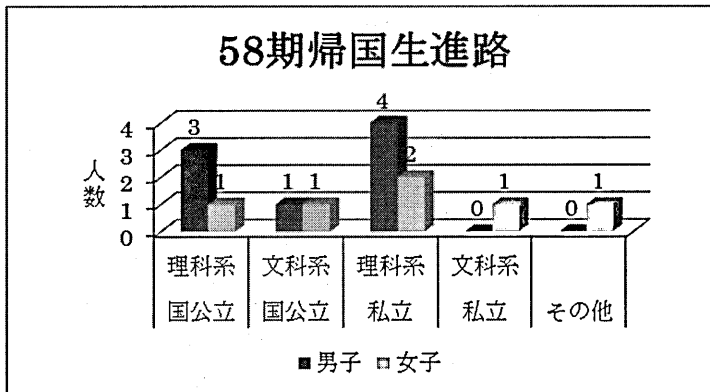
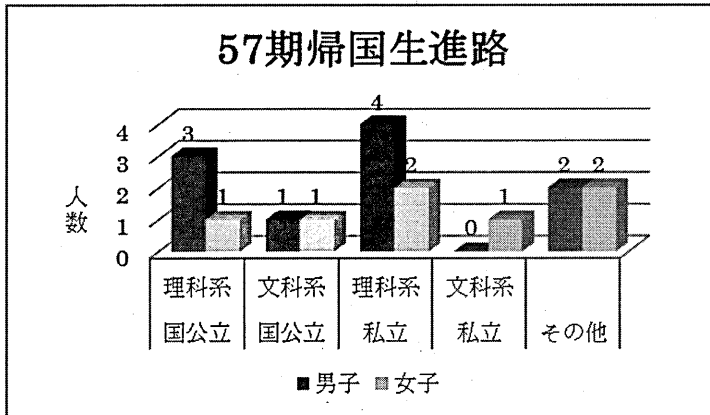
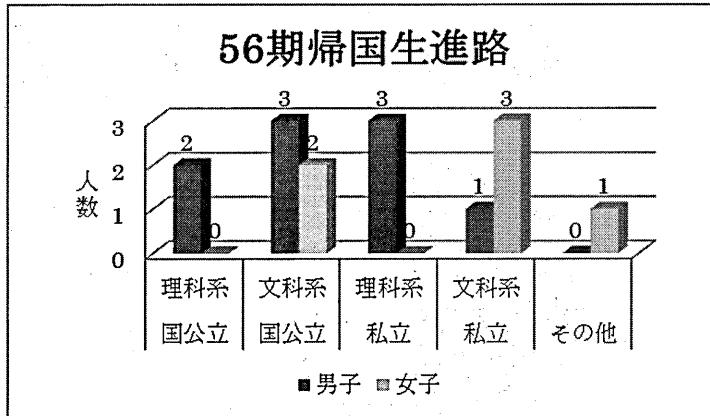


図3 56期～59期帰国生進路

- A：英語圏現地校出身（女子）
- B：英語圏現地校出身（女子）
- C：非英語圏日本人学校出身（男子）
- D：非英語圏日本人学校出身（男子）

※ C、D の 2 人は、インターナショナルスクールの在学経験あり。

① 本校に入学することにした決め手は？

- A：家から近かったから。
- B：学校説明会の時に流された附高の CM を見て、楽しそうな学校だと思ったから。
- C：入りたい部活動があったから。
- D：帰国生が特別扱いを受けず、他の生徒と同様の学校生活を送ることができるから。

② 入学してから、いつ、本校で学習していけると感じたか？

- A：1 学期期末テスト後
- B：1 学期中間テスト後
- C：1 学期中間テスト後
- D：4 月下旬

4 人とも、入学直後は周りの生徒が自分より勉強ができると感じて、本校で学習していけるか不安に思ったが、周りの生徒の通常の授業での様子や定期テストの結果を見て、自信を回復して、本校で学習していけると感じていた。

③ 入学して不安な時に、その不安をやわらげてくれたものは？

A～D：部活動や、友人といて楽しかったこと。

④ 帰国生として、学校に望むことは？

- A、B、D：英語の授業のレベルをあげてほしい。
- C：非英語圏の帰国生の場合は、日本の中学校で習う英語の内容も考慮してほしい。

本校では混合受け入れ方式で、英語の伸長を直接目指してはいないことは知った上で入学してくるが、やはり、英語圏からの帰国生は英語の授業に関する不満があり、それがストレスになっている。授業で扱っている英文があまりに易しい内容であるため、かえって不安になるという。

単に、英文を覚えるのではなく、エッセイを書くなどアウトプットの機会をふやしてほしい、授業にディベートを取り入れると、考えの幅が広がってよい、ALT（外国語指導助手）の数を増やして、英語でのコミュニケーションの機会を増やしてほしいといった具体的な希望を述べていた。

今回、このようなインタビューを帰国生の一部にした

が、本校の教員にふだん思っていることを話せたから、少しすっきりしたと述べていた。今後は、単に、質問タイムだけでなく、定期的に帰国生の話を聞いてあげる機会を設けることも必要であろう。

一方で、非英語圏の帰国生の場合は、英語圏の帰国生ほど、英語ができるわけではないのに、周りからは「帰国生＝英語ができる」と見られるのがプレッシャーだという。

英語圏以外の国や地域からの帰国生が増えている現状を考えると、帰国生に対する英語の授業のあり方については、今後、検討を要するであろう。

## 5. 国際交流活動について

近年、帰国生・留学生委員会の業務として増えつつある、国際交流活動についてまとめておく。

### 5-1 日中ティーンエイジ・アンバサダー

1989 年にお客様から頂いた利益を社会のために役立てたいという趣旨で設立された「イオン 1%クラブ」が、国際的な文化・人材交流・人材育成の一環として行っているティーンエイジ・アンバサダー事業の一つである。相互交流を通じ、相手国の文化や歴史に触れる一方、体験授業やホームステイを通じ、相互理解の促進を支援している。

かつては、日中小大使と呼ばれており、本校は平成 22（2010）年度より参加している。

平成 22（2010）年度：北京市の高校生 20 名との交流  
 平成 23（2011）年度：北京市の高校生 20 名との交流  
 平成 24（2012）年度：北京市の高校生 30 名との交流  
 平成 25（2013）年度：北京市の高校生 10 名との交流  
 平成 26（2014）年度：武漢市の高校生 15 名との交流  
 今年度は、7 月に中国の北京市、武漢市、蘇州市の 3 市より 60 名の高校生が来日し、日本側は本校のほか、筑波大学附属高等学校、千葉市立千葉高校が参加している。本校は武漢市の高校生 15 名との交流を行った。

〔7 月 6 日（月）〕

武漢市の高校生が来日する。

〔7 月 7 日（火）〕

武漢市の高校生が歴史・文化活動を行った。

〔7 月 8 日（水）〕

武漢市の高校生が歴史・文化活動を行った。

〔7 月 9 日（木）〕

本校生は学校を 8 時 10 分にバスで出発し、10 時に東京タワーで、ペアとなる武漢市の高校生と対面した。日

中の高校生が共同で大使活動を行った。首相官邸を表敬訪問し、昼食でちゃんこ鍋を食べた後で、外務省を表敬訪問した。その後、中国大使館での歓迎会に出席し、日本舞踊とひょっこり踊りを披露した。通常、高校生が首相官邸や中国大使館に入ることはできないため、日中ティーンエイジ・アンバサダーとして、貴重な大使活動を行うことができたことは参加生徒にとって、とても有意義であった。

〔7月10日（金）〕

本校に武漢外国語学校の高校生15名が授業体験にやってきた。会議室で歓迎会を行った後、剣道部、卓球部、弓道部の部活動体験をしてもらった。昼食後、授業体験として、1時間目は家庭科で和菓子を作成し、2時間目は英語でゲームなどをしてもらった。

その後、会議室で、家庭科で作成した和菓子を食べながら、グループディスカッションをした。

集合写真を撮った後、本校の生徒と共にホームステイ先へと向かった。



写真1 東京タワーでの対面

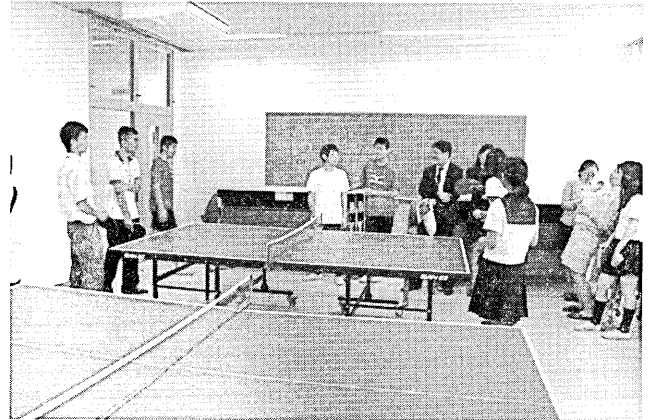


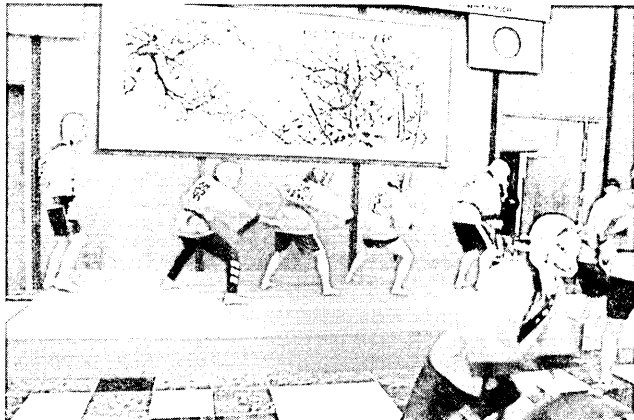
写真4 部活動体験（卓球部）



写真2 中国大使館



写真5 部活動体験（弓道部）



日本舞踊 写真3 中国大使館 ひょっこり踊り



写真6 部活動体験（剣道部）



写真9 集合写真



写真7 授業体験（家庭科）



写真8 授業体験（英語）

〔7月11日（土）〕

1日、ホームステイ先での交流活動を行った。

〔7月12日（日）〕

それぞれのホームステイ先から、東陽町にあるホテルイースト21 東京へ集まり、盛大にフェアウェルパーティが行われた。フェアウェルパーティでは、本校はダンスを披露した。

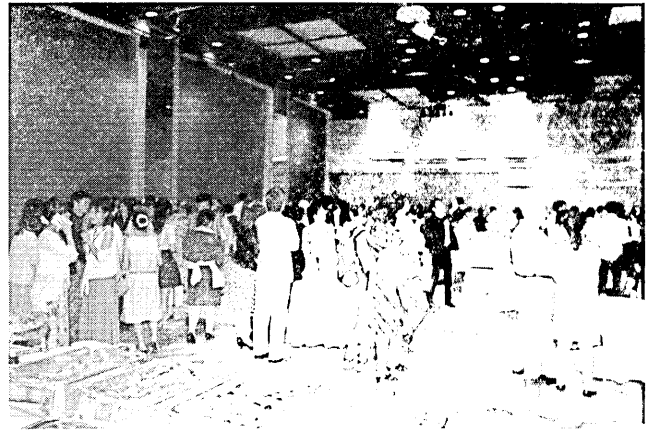


写真10 フェアウェルパーティ



写真11 フェアウェルパーティ ダンス

〔7月13日（月）〕

武漢市の高校生が帰国する。

日本のティーンエイジ・アンバサダーは、10月7日（水）～14日（水）に中国の北京および、武漢へ派遣された。

〔10月7日（水）〕

本校の高校生が北京に向かい出発する。北京市什刹海体育運動学校で、太極拳体験などをし、中国功夫ショーを鑑賞した。その後、北京市人民政府主催の歓迎会で、北京ダックなどの夕食を食べた。

〔10月8日（木）〕

歴史・文化活動として、万里の長城、紫禁城を見学した。

〔10月9日（金）〕

大使活動として、北京市政府表敬訪問、外交部表敬訪問をし、その合間に、人民大会堂、天安門広場の見学をした。夜は、日本大使館での歓迎会に出席した。



写真12 太極拳体験



写真13 万里の長城



写真14 日本大使館での歓迎会

〔10月10日（土）〕

北京から武漢へ移動し、武漢市人民政府表敬訪問を行った後で、武漢市の高校生と共にホームステイ先へと向かった。

〔10月11日（日）〕

1日、ホームステイ先での交流活動を行った。



写真15 武漢市人民政府表敬訪問

〔10月12日（月）〕

ホームステイ先から、武漢外国語学校に集まり、授業体験をし、夜は長江からの夜景を船で眺めた。



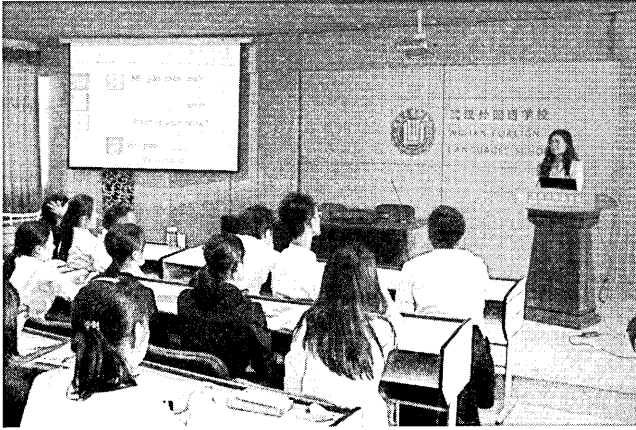


写真16 学校訪問

[10月13日(火)]

武漢企画展示館、漢繡博物館を見学した後、フェアウェルパーティが行われた。



写真17 フェアウェルパーティ

[10月14日(水)]

本校の生徒が日本へ帰国する。

以下に、今回参加した4人の生徒の感想を紹介する。

[2年生男子]

僕が日中ティーンエイジアンバサダーに参加したのは中国が好きだからではない。もちろん今は大好きだが、当時はそうでもなかった。ではなぜ参加したのか、外国人に接してみたかったからである。僕は日本で生まれ育った。僕の国際経験は無いに等しく、日本での経験が僕の全てだった。

そんな僕だが、去年の台湾への旅行をきっかけに日本の外を知った僕は自分の知っている世界は小さいのではないかと思いはじめようになった。

歴史、習慣、食べ物、言葉、価値観、流行り… と思

いつく全てのものは国によって違う。どれかの点で国同士が似ていることはあっても全く同じということはない。そんな中、僕が生まれてから身につけて僕の人格形成に関わったものは全て「日本のもの」である。日本は僕の大切なアイデンティティであるが、たくさんの習慣や価値観がある中で、ある意味僕は日本という枠組みに支配されているともいえる。そう思うと僕は「他の国のもの」に触れたいという渴望に襲われた。

だが、他国の文化を理解するにはインターネットや本だけでは不十分で、文化とは人によって受け継がれるものであるから、その人間と接することも必要である。そこでこの事業に参加したのだ。

だから僕は万里の長城などの世界遺産、外交部や市政府への表敬訪問よりもその間の隙間の時間にとる彼ら中国人とのコミュニケーションが一番楽しみだった。他のペアの子にも積極的に話しかけた。普通の高校生の会話であっても、中国人と笑いあうのには生まれて初めての新鮮さがあったし、楽しかった。彼らは皆面白く優しい。ペアはホームステイでは親族を呼んで僕を迎えてくれた。お互いに相手を理解しようとする、大抵のことは英語でも通じた。中国人の親友もできた。

人と接することに重きをおいた僕だが、学んだことはいたってシンプルである。それは、中国人も日本人もさほど変わらないということだ。日本人が十人十色であるように中国人にも個性があり、彼ら全員を一言で表そうとするのは無理である。今回のメンバー日中30人全員がそれぞれ自分の個性を持っていて、そこに日中という分類を持つてくることは不可能である。日本人が嬉しく思うことは中国人も嬉しく思い、日本人が嫌に思うことは中国人も嫌に思う。文化は違えどその前に僕たちは同じ人間だったのだ。考えてみれば当たり前のことだが、これまでにとって中国人は得体の知れないものだった。このことは自分の肌で感じてみないと真には理解できないと思う。自分の目で確かめることは大事だ。本当に大切なことを学べた。その点だけでもこの日中ティーンエイジアンバサダーに参加して本当によかった。これだけでなく、みんなとの楽しい思い出や団長として少し大変だった思い出、この事業を通して得た全てのものは僕の血肉となっていっくだろう。

最後に、この事業を通して出会ったたくさんの全ての人、本当にみんなに出会えてよかった。この事業が終わって、僕とペアはそれぞれの生活にもどり僕たちの日常を結びつけるものはなくなった。今もチャットを楽しんでいるが、今後もそれぞれの人生を歩んでいく。でもこれ

だけは言える。どこで何をしようが、僕のことを兄弟と呼んでくれたペアはいつまでも変わらず僕の中国の兄弟だ。次に合うのが楽しみではない。

#### [2年女子]

私は中国という国に対してそこまで悪い印象を持ったことがなかった。いくらテレビや新聞で報道される中国での反日デモなどの様子を見ても、日本が嫌いな人もいるけれど中には親日の中国人もいるのだろうな、となんとなく考えていた。しかし出発前日、中国に行くことが急に怖くなった。もちろん楽しみでもあったが、自分が今まで中国に対して持っていた考えはただの勝手な想像で何の根拠もなく、中国という国がどんな国なのか本当は全く何の知識も持っていないことを初めて認識し、自分があまりにも無知なことが怖くなったからだ。それでも出発日はやってきて、とにかく中国に無事着いた。

いざ中国に降り立つと、歩いている人々は自分たち日本人と顔はほとんど変わらず、街の看板は漢字だらけで似ている所がたくさん見つかった。

しかし当たり前だが違う部分もあり、その違いに戸惑うことも多かった。中国の人の口調は、私の耳にはいつもきつく聞こえ、常に怒っているようだった。しかし、私のペアに聞いてみると口調がきついのは中国人のただの習性で、特別怒っているわけではないらしいと後で分かった。また、食卓での振る舞いが日本でのマナーとは違い、最初ははっきり言って汚いと感じた。しかしそれも中国の人にとっては普通のことだと教えてもらった。さらに、いつも私に優しく接してくれていたペアは、家に戻って親の前になるとかなりわがままな性格が変わったのだが、それは親からすると普通なことのように、家族のあり方も国によって全然ちがうのだと感じた。

1週間の中で体験したことの中には、楽しかったことや面白かった思い出がたくさんあるが、私には理解しきれなかった違いもあった。しかしその全てが、今の私が中国に対して持つ印象となっていて、単純に良い、悪いでは言い表せない。中国に行ったことで私の中で変わったことは、中国に対して、自分で見た根拠のある事実をもとに考えを持つことができるようになったことだと思う。自分で見たことは自信を持って信じられるからだ。

中国に行く前の自分がそうだったように何に関しても「知らない」ことは怖いのだと思う。そして「知らない」ことは悪いイメージをつくり出し、特にそれが外国のことであれば自分の目を見て「知る」機会は限りなく少ないものであるため、イメージを変えることが難しい。で

は具体的にどうすればたくさんの人が持つ中国への先入観を変えていけるのか、それは自分が見てきたことをありのまま伝えることなのだろうと思う。

新しいことを知ることが、自分の世界を広げていくことを強く実感した。そして最後に、プログラムを支えてくださった全ての方々に感謝したい。ありがとうございました。

#### [1年男子]

僕が日中小大使に参加した理由は3つあります。ひとつは偏見の解消、2つめは異文化交流、そして3つめは外交官という役職への理解についてです。

まず、ひとつめの偏見の解消についてですが、私たちの中には「中国の人は怖い」や、「日本はおもてなしの国」というイメージを持つ人もいます。しかし、僕はそのどちらもそうとはいえないと学びました。中国の小大使の人々は、荷物を下ろすバスの添乗員さんを自分から積極的に手伝ったり、火鍋を食べるときに毎回みんなの分の食材を鍋に入れてくれたり、円卓で食事をするときは自分のためではなく他の人のためにテーブルを回したりしていました。僕は中国の人にたいしてそこまで偏見を持っていないつもりでしたが、「日本は他国よりもおもてなし意識が高い」というイメージはあった気がします。

2つの異文化交流については、ホームステイで様々なことを学びました。やはり日本の文化を基準にして他国の文化を見てしまうと少し違和感があるもので、食べカスをテーブルの上に置いたり、シャワーで体を洗った水が横にある便器へと流れたり、使用したトイレットペーパーをゴミ箱に捨てたりするのには抵抗がありました。なるほどなあと思ったのは、友達が「中国人が日本で中国のマナーで過ごすのを日本人が日本の文化を基準に見て『礼儀が悪い』と感じてしまうことが偏見へとつながるのではないか」と話していたことです。そういう意味で異文化理解は大切であると学びました。

3つめは、外交官という役職への理解についてですが、私はプログラムの中で様々な日本や中国の外交官の方のお話を聞きました。日本の公使の方に「外交官の意見が他国のメディアに取り上げ、批判などを受けるニュースなどを時々見ますが、それについて気をつけていることはありますか」と質問したところ2つのことに気がついていると教えていただきました。

1つ目は、自分の意見を決して言わないこと。外交官の意見はその国の意見として捉えられてしまうため、国



としての意見を言うそうです。これは中国の外交官の方も気をつけているとおっしゃっていました。

2つ目は、他国が自分たちと違う文化背景を持っていることを理解すること。その意見を言うと相手国がどう受け取るのか、どういう言い方をすれば相手に正確に伝わるのかを考えて発言するそうです。

また、この公使の方に聞いた質問を別の日本の公使の方に質問したところ、全く同じ答えが返ってきて少し驚きました。それだけこの2つのことは重要なのだと思います。この経験で学んだことは、ニュースではあまり印象が良くない外交官の方でも、実際はそうとは限らないということです。報道官の前ではほとんど笑ったりしない方も、実際はジブリ好きで話すのが好きな人でした。それに加え、外交官は自分の意見を言えないので、たとえ自分がそれは間違っていると感じて、それを口にしてはいけないそうです。このことを聞いて、僕の外交官へのイメージは大きく変わりました。

これらの大切な経験もしましたが、なにより楽しかったです。また、このようなプロジェクトに参加したいと本当に思います。

〔1年女子〕

「中国かー。アメリカとかヨーロッパだったらよかったな。」このプロジェクトのことをはじめに聞いた時には正直こんな風に考えてしまった。それは、今思えば中国への先入観や知識不足によるものだった。7月に武漢の学生たちが来てくれた時から、中国に対する印象はとも変わった。その時は、みんながとても元気で明るくみんな元気だなあという印象が大きかった。

日中小大使として中国に行く前、私の周りの人たちは応援してくれる人が多くて、意気込んでいた。いざ中国に行ってみて、パートナーと会う前に観光をしていた時、私は盗難にあってしまった。そのとき私は、やっぱり中国はこういうところなのかと昔の先入観が蘇った気がした。しかし、よく考えればそこも中国人の生きるパワーなのではないかと考えられる。パートナーやその家族にはたくさんの思い出を作らせてもらったり、武漢外国語学校では、学びに対する強い思いを感じることもできた。

今回実際に中国に行ってみてわかった中国人に対する印象は、自分やその家族の生活をよりよくするために、日本人よりも全力で物事に取り組む人が多いということだ。日本人も今の生活に満足せず、ハングリー精神をもって生きるべきであると思う。

このままのスピードで中国が未来へ進んでいけば、

きっと私が20歳、30歳になるころには今とは全く別の国へと成長しているだろう。しかし、そこで生きている人はほとんど変わらない。今回会った中国の学生たちは、私の中では一番身近な中国人だ。これから先も中国人といえれば彼らを思い出すと思う。だからこそ、彼らとのつながりは何年たっても絶えるものであってはならないと思うし、続けていきたい。そして、彼らにとって私たちがまた身近な日本人といえるだろう。だから、日本人の代表としてずっと良い関係でいたいと思う。

中国から帰ってきて日本で生活していて感じることは、あの8日間は本当に充実していたということだ。これは私にとって一生の財産であり、日本では絶対に味わえない経験だと思う。また、物事に対する姿勢も変わった。学校の授業中、中国のみんなは今頃頑張っているのだと思うと自分も頑張らなくてはと思って集中でき、部活でもより一層努力しようという気持ちになれる。新しい目標も見つかった。これは私にとって大きな変化で、これからの私の生活を大きく変えるものであると思う。日中小大使に参加できて、改めて人として成長し、変わることができたと思う。このきっかけとなった大切な8日間を一生大事にしようと思う。

以上の4人の感想からも、このプログラムに参加した生徒にとって、とても有意義なものであったことが分かる。来年度から、日中ティーンエイジアンバサダーは、公募制となる。参加に当たっては、必ず、男女各1名ずつの引率教員が必要となる。さまざまな困難があるが、本校の教育活動の一つとして、是非とも継続して参加できればと思う。

## 5-2 SSH 関連の交流事業

本校には、SSH 関連の国際交流事業がいくつかある。SSH 関連の事業であっても、帰国生・留学生委員会は交流事業に中心的に関わっている。詳細の報告は、SSH の報告書に譲るとして、簡単に述べておく。

① 平成 27 (2015) 年 4 月 21 日(火) ~ 28 日(火)

プリンセス・チュラポーン・サイエンス・カレッジチェンライ校 (PCCCR) の生徒 12 名、引率教員 3 名をタイ王国より受け入れる。

② 平成 27 (2015) 年 4 月 24 日(金)

台北市立建国高級中学校生徒 30 名、引率教員 5 名、東京観光財団 2 名を台湾より受け入れる。

上記 2 校と本校とで、4 月 24 日(金)にサイエンスフェアを行った。講堂で口頭発表、大体育館でポスター発表を行った。海外への派遣は、予算の関係もあって、人数

が限られてしまうが、海外からの高校生を本校に招いて、サイエンスフェアを行うと、ある程度、人数が限定されることを解消することができるであろう。

### ③ 平成27(2015)年7月24日(金)

韓国ガリム高等学校生徒30名、引率教員4名、ファシリテーター1名を受け入れる。この時は、夏休み中で、かつ、林間学校の期間中であったため、対応できる教員が限られ、以下のような対応となった。

14:00 本校生打合せ(地学実験室)

15:00 韓国高校生到着 出迎え(正門)

15:00～15:30 歓迎会(会議室)

#### 〈式次第〉

- 1) 歓迎の言葉(副校長)
- 2) 韓国側代表挨拶
- 3) 本校生徒代表挨拶
- 4) 韓国生徒代表挨拶
- 5) 学校紹介DVD鑑賞
- 6) 日程説明

15:30～16:00 校内見学

(6名×5グループ/各グループ本校生徒2名による案内)



写真18 歓迎会



写真19 ディスカッション



写真20 集合写真

16:00～16:50 ディスカッション(会議室)  
(5グループで)

16:50 集合写真(中央玄関前/雨天時は会議室)

17:00 韓国高校生出発、見送り(正門)

※見送り後、本校生徒解散・下校

今回は、急な話であり、来日した日の訪問であるため、本校に午後からしか来校できないという状況であった。そのため、先方の希望であった授業体験などを入れることができなかった。今後、継続して交流が望まれるようであるならば、午前中から来校してもらい、授業体験を含めた交流プログラムを実施したいと思う。

### 5-3 学校訪問

今年度は平成27(2015)年12月8日(火)に、タイ王国からの学校訪問があった。この時は、教員のみ6名、通訳が1名のあわせて6名の訪問であった。通訳はかつてタイ王国政府派遣留学生として、本校を卒業した方であった。この時は、以下のような対応であった。

12:50 出迎え(正門)

13:00～13:10 副校長挨拶、タイ王国政府派遣留学生挨拶(会議室)

13:10～14:00 数学、物理の授業見学

14:10～14:40 生物の授業見学

14:50～15:50 懇談会(会議室)

#### 〈式次第〉

- 1) 日本側自己紹介
- 2) タイ王国側自己紹介
- 3) 参観した授業についての質疑・応答
- 4) 学校紹介DVD鑑賞

15:50 集合写真(中央玄関前/雨天時は会議室)

16:00 出発、見送り(正門)



写真21 授業見学（生物）



写真22 集合写真

#### 5-4 今後の課題

本校の場合、SSHに伴うプリンセス・チュラポーン・サイエンス・カレッジチェンライ校（PCCCR）の交流以外は、通常の授業時間に、対応可能な帰国生・留学生委員会の教員が中心になって、国際交流事業や海外からの学校訪問も対応をしている。

今後、国際交流事業や海外からの学校訪問が増えるようであれば、どうしても帰国生・留学生委員会の教員だけでは対応できなくなるであろう。生徒だけでなく、教員もグローバルな視野を持つ機会ととらえて、帰国生・留学生委員会という分業にこだわらず、学校全体でこれらの対応を考えていかなければならないと思う。

#### 6 おわりに

今回の研究では、帰国生・留学生委員会の業務のうち、帰国生の入試業務および、受け入れ、国際交流活動についてのみ取り上げた。そのため、本校生徒の海外留学送り出し、タイ王国政府派遣留学生受け入れについては触れていない。これらについても、現状に問題点がないか

どうか考察を試みる必要があるだろう。

なお、この紀要の文責は帰国生・留学生委員会（※）の役割分担で、今年度、紀要執筆の担当であった田中にある。

※平成 27（2015）年度帰国生・留学生委員会：

六谷 明美、小林 雅之、若宮 知佐、藤 千恵、  
栗山 絵理、吉岡 雄一、久野 あゆ美、熊木 孝太、  
田中 義洋

#### 参考文献

海外生・留学生委員会，1985，本校における海外帰国生の受け入れの現状と適応の問題－アンケート調査による適応の実態－，東京学芸大学附属高等学校研究紀要，22，81-119.

海外生留学生委員会，1996，本校の海外帰国生及び留学生の受け入れ状況と適応について（第31期生から第40期生までの実態調査の報告），東京学芸大学附属高等学校研究紀要，33，109-125.

海外生留学生委員会，2002，帰国子女教育のあり方についての研究（タイ国留学生を含む）（第46期から第48期までの実態調査と指導についての研究），東京学芸大学附属高等学校研究紀要，39，13-153.

東京学芸大学附属高等学校大泉校舎，2012，大泉校舎38年の歩み 帰国子女教育1974～2012，東京学芸大学附属高等学校大泉校舎，234pp.

#### 参考 URL

以下のホームページは、すべて2015年11月30日現在のものである。

海外子女教育振興財団

<http://www.joes.or.jp/sodan/answer.html#18>

文部科学省

[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/kaikaku/sikaku/1311012.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kaikaku/sikaku/1311012.htm)

立命館宇治高等学校

[https://www.ujc.ritsumei.ac.jp/ujc/common/file/admission/document/2016\\_senior\\_kokusai.pdf](https://www.ujc.ritsumei.ac.jp/ujc/common/file/admission/document/2016_senior_kokusai.pdf)